

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習 (〈インタラクティブ〉 特別授業)

〈授業のねらい〉 と 〈詩人・金子みすゞ〉 さん

(第1回：2014-10-31)

担当： 石井 拓洋

ishii05042@venus.joshiabi.jp

2014

【 授業形態 】

- 「補講」的 授業
- 金曜日・週1回・全7回
- 「講義」と「実習」（「インタラクティブ」作品とは別内容）

【授業目的】

- 次年度の卒業制作作品の〈充実〉
- とくに制作理念面での〈充実〉

〈充実〉のために、、、

- 〈世界認識〉にかかわる代表的論点の確認
- 近代的イデオロギーとしての「芸術」を相対化する視点
- 芸術の本質としての「ミメーシス」(模倣)説の確認

本日のメニュー

【本日のメニュー】

- この「授業のねらい」について

- 童謡詩人 金子みすゞさんについて

映像『明るいほうへ明るいほうへ-童謡詩人 金子みすゞ』
(TBS 創立50周年記念番組、2001年8月27日 放送)

授業説明 - 授業のねらい（シラバス）

【この授業のねらい】

【授業のねらい 01/16】

環境問題、人口問題、民族対立、社会規範の喪失等をあげるまでもなく、現代のわれわれが暮らす環境には、さまざまな問題が露呈している。

これらの問題の多くは、皆が被害者であると同時に、また加害者ともなる構造をもつことに着目すべきである。

つまり、誰も「高みの見物」を決め込むことは出来ない
のである。

【授業のねらい 02/16】

このような現代の問題を考えるにあたり、
われわれの従来的な世界認識や、それに基づく
思想風潮 (イデオロギー) は、根底からの再考が求められている。
つまり、それは啓蒙思想に導かれた、十八世紀の産業革命、
市民革命以来の、西洋における「近代主義」的世界認識である。

【授業のねらい 03/16】

かつて「個人」を生み出し、科学を飛躍的に発展させ、
「ユートピア」を約束したはずの「近代」は、しかし、
いみじくもアドルノらが指摘したように、二度の大戦、
ナチスの蛮行、そして核兵器をもたらし、
すでに百年前に、むしろ〈野蛮〉を招くことを露呈した。

【授業のねらい 04/16】

また、「自然」は、いずれ科学において「機械論」的に制御可能となるべきものであった。しかし、巨大地震や異常気象に顕著であるように、それは、われわれの認識よりも、はるかに複雑で壮大なスケールを持つものであったと言わざるをえない状況である。

【授業のねらい 05/16】

さらに、かつては「野蛮なる未開人」と目され、いずれ、啓蒙されるべき存在と思われていた非西欧圏の人々の風習に、高等数学に基づく文化の構造を「近代」が看取した時、その傲慢なる西洋中心主義的、かつ、そのあまりに楽観的な進歩主義的な近代の神話はついに揺らぎはじめた。

【授業のねらい 06/16】

「現代」のわれわれは、「近代」がもたらした科学的発展などの恩恵を継承しつつも、その一方で、今現在の無視しえない問題を前にして、その問題の淵源としての〈近代知〉に基づく世界認識の批判的検討が求められている。そして、批判的検討を通じた、いわば〈現代知〉に基づいた、新たなる世界認識の構築が求められているのである。

【授業のねらい 07/16】

現代のほとんどの学問領域（人文科学、社会科学、自然科学）の問題意識とは、およそ、このような背景に基づいて表れた諸相といえる。そして今、大学という特殊な場に、あえて身を置きながら芸術に携わるわれわれとしては、このような学問領域の文脈のなかで、芸術を考えていくこともまた必要ではないだろうか。

【授業のねらい 08/16】

さて、このような「現代」において、
「芸術」に携わるわれわれは、「芸術」によって、
いったい何ができるのだろうか？
そもそも、作品を構想し、作品を作るということ、
そこに、どのような意義が見出さうのだろうか？

【授業のねらい 09/16】

このような問題を考えるにあたっても、
われわれは「近代」を視野にいれねばならない。
なぜならば、われわれの「芸術」に対する認識もまた
おおいに「近代」のイデオロギーを反映したものと
考えられるからである。

【授業のねらい 10/16】

現代のわれわれの多くが自明視する「芸術」における価値

とは、およそ「芸術家個人の個性と内面性の表現」(松宮秀治

『芸術崇拜の思想』 p.14) とも言うべきものではないだろうか。

そして、古代から現代まで、いつの時代のどの地域でも

このような創造性や独創性にこそ「芸術」がつねに価値

づけられてきたと自明視する向きも多いかもしれない。

【授業のねらい 11/16】

松宮氏をはじめ、現代の多くの識者は、
先のような「芸術」における自明なる価値の認識とは、
約二百年前頃の「西洋近代」という限定された時期と
場所によって形づくられたにすぎないことを指摘する。
つまり、われわれの多くの「芸術」の認識は、いまだ
「近代思想」に影響されたままとも言えるのである。

【授業のねらい 12/16】

それでは、近代以前の「芸術」なる存在は、
いったいどのように価値付けられるものであったのか？
美学研究の青山昌文氏をはじめ、多くの識者は
ここで、アリストテレスの「ミメーシス」に基づく
芸術の価値を指摘する。

【授業のねらい 13/16】

「ミメーシス」 mimesis とはギリシャ語が語源であり、日本語では「模倣」や「再現」と訳されるものである。アリストテレスによれば、われわれの現前の世界、それ自体にすでに「本質的な価値」が内在し、それを、詩や絵画や音楽といった手段を使用して 「ミメーシス」 (模倣) することにおいて芸術が価値付けられるとされる。

【授業のねらい 14/16】

この「ミメーシス」による芸術の理念は、また、
二十世紀の思想家アドルノによっても価値付けられた
ことで知られる（細見和之『アドルノ：非同一性の哲学』
1997年など）。

【授業のねらい 15/16】

この授業では、様々な問題を抱える現代において、
「芸術」が何をしうるのか、その営みが、
どのように意義をもち・価値づけられうるのかを、
「近代批判」や「ミメーシス」を軸として、
考えてみたい。すくなくとも、それを考えるためには
最低限必要となるであろう基礎的視点を提供したい。

【授業のねらい 16/16】

授業は「講義」と「実習」で構成される。「講義」では、おもに、問題意識をうむ淵源といえる「西洋近代」についての認識を深めること、「実習」では、課題提出という形にあまりこだわることなく、おもに、「ミメーシス」の認識を深めるために、「体験すること」をとくに企図している。

【講義内容】

- なぜインタラクティブ性がもとめられるのか？
- 世界の見方 : 「近代」と「現代」
- 作品の見方 : 「批評理論」の基礎
- 「ミメーシス」 mimesis (模倣) の理念の確認

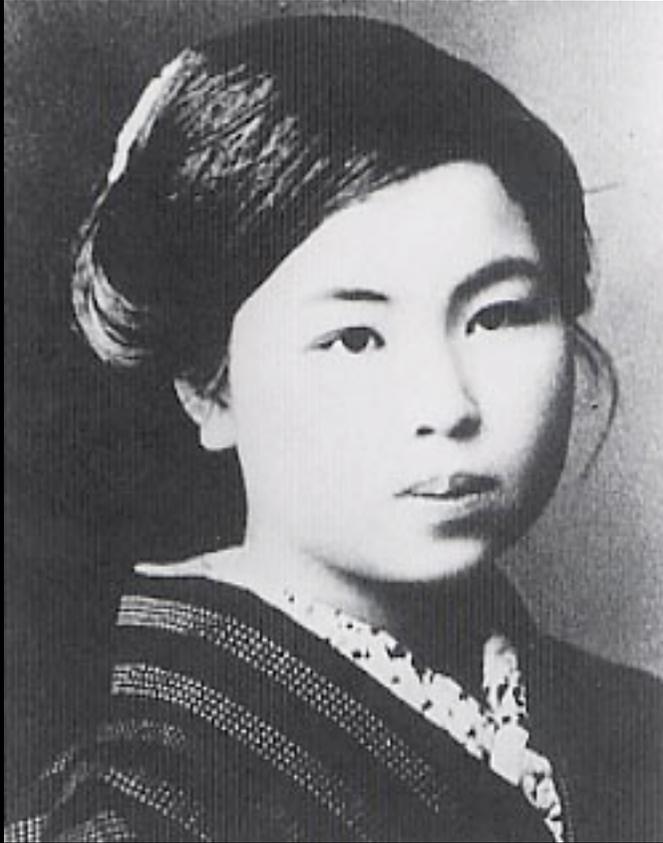
【実習内容】 (実験的だが、、、)

- ・ 「詩」と「音」と「映像」の共生の実験
- ・ 作品内部でのメディア間のインタラクティブ

(※ 一つのイメージとして)

【Youtube】宮沢賢治 21世紀映像童話集 やまなし

<http://www.youtube.com/watch?v=JcaGlc7hYIc>



画像: wikipedia「金子みすゞ」より

- ・ 金子みすゞ (1903 – 1930)
- ・ 童謡詩人
- ・ 代表作
 - 「おさかな」
 - 「私と小鳥と鈴と」
 - 「こだまでしょうか」
- ・ 享年26歳

木

お花が散って
実が熟れて

その実が落ちて
葉が落ちて

それから芽がでて
花が咲く。

そうして何べん
まわったら
この木は御用が
すむかしら。

金子みすゞ



【実習内容】 (実験的だが、、、)

「詩」と「音」と「映像」の共生の実験

- 背景画像とテキストが適宜現れる映像を作成
- 詩の世界を模倣する自然音や背景音楽を付す
- テクストを〈模倣〉して作成した旋律を付す
- 朗読をはぶいてみる

音の3要素「音高、音の強さ、音色」。

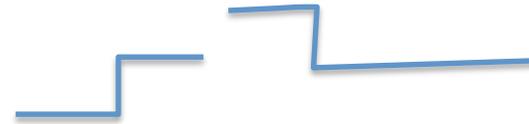
リズム、構成感、内容の反映

例

お花が散って



実が熟れて、



旋律線
イメージ

その実が落ちて



葉が落ちて、



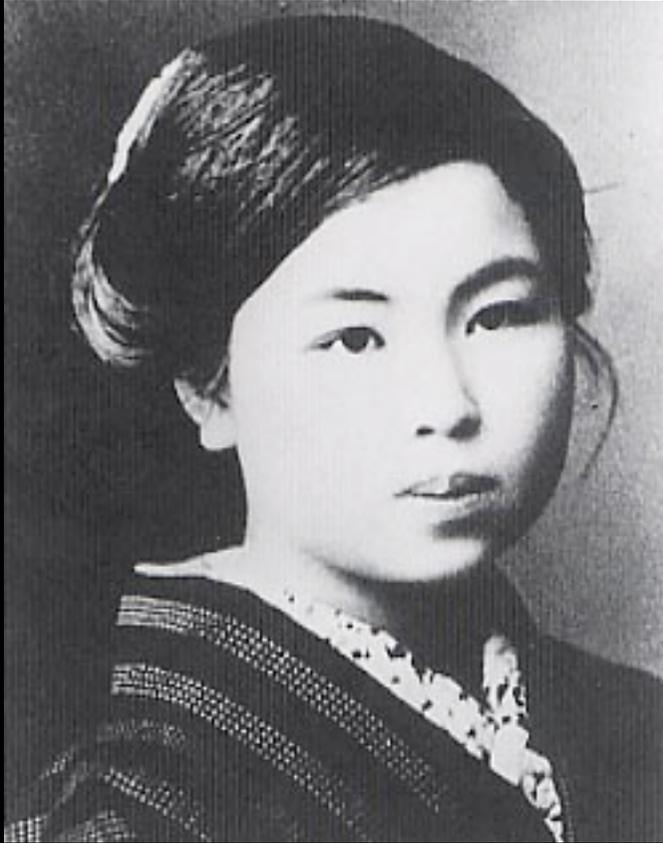
金子みすゞ「木」冒頭2連より

【実習内容のねらい】 (実験的だが、..)

- 詩のテキストを、音の3要素の側面から〈模倣〉
- 詩のテキストの「文脈」を活かした〈模倣〉
- 表現内部でのメディア間のインタラクティブ
- 作品内部に秘めた概念としてのインタラクティブ

童謡詩人 金子みすゞ さんについて

童謡詩人 金子みすゞ さん について



画像: wikipedia「金子みすゞ」より

- ・ 金子みすゞ (1903 – 1930)
- ・ 童謡詩人
- ・ 詩人 西条八十 に才能を見出される
- ・ 代表作
 - 「おさかな」
 - 「私と小鳥と鈴と」
 - 「こだまでしょうか」
- ・ 享年26歳
- ・ 本名 金子テル さん

童謡詩人 金子みすゞ さんについて

【なぜここで、いきなり 「詩」 なのか？】

- 音楽は本来、詩 (ことば) と 共にあったと考えるから
 - 近代的 「自律音楽」、「自律芸術」 批判の立場から
- 詩こそ 「ミメーシス」 が反映したものであるから
 - (典拠) アリストテレス 『詩学』 (前4世紀)
- 「ムーシケー」としての統合、調和的な音楽の再考
 - 近代的 「自律音楽」、「自律芸術」 批判の立場から

童謡詩人 金子みすゞ さんについて

【なぜ 金子みすゞ なのか？】

- 〈人間と自然との共生〉をうたうものとして
 - 「私と小鳥と鈴と」など。 脱二元論的な〈自然の精神性〉へのまなざし
- 近代日本の女性表現者としての生きざま
 - 男性中心主義的 (近代的) な中での困難
- 韻律やことばの量 が音楽を想起しやすい
 - 詩と音楽との融合を想起しやすい

私と小鳥と鈴と

金子みすゞ

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄はしらないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがつて、みんないい。



童謡詩人 金子みすゞ さんについて

【映像資料】

『明るいほうへ明るいほうへ-童謡詩人 金子みすゞ』

(TBS 創立50周年記念番組、2001年8月27日 放送)

以上